

岡部藩主安部家と異国文化を巡って

高田 智仁

はじめに

岡部藩は、川越藩、岩槻藩、忍藩と並び埼玉県と深い縁をもつ譜代大名の一つである。その歴史は、天正十八年（一五九〇）八月一日の徳川家康による関東入国に随行した、安部弥一郎信勝（一五五二―一六〇〇）が武蔵国榛沢郡岡部村（現深谷市）をはじめとした五二五〇石の所領を与えられて同村に陣屋を構えたところに端を発している。

信勝の嫡男信盛（一五八四―一六七四）の代に、三河国八名郡四〇〇〇石の加増、慶安二年（一六四九）には大坂城代を輔弼する重職である大坂定番に任ぜられるとともに摂津国に一〇〇〇〇石の加増を受け、都合一九二五〇石の所領を以って大名に列した。

最終的な所領は武蔵国四三七七石余、上野国八七四石余、摂津国七〇〇〇石、三河国六〇〇〇石、丹波国二〇〇〇石、総計二〇二五〇石を表高としている。

岡部藩ならびに藩主である安部家の事績については、『新編埼玉県史』⁽¹⁾をはじめ諸研究が既に明らかとしてきたところであるが、その一方で、殊に文化的な事績については未着手の状況にあった。そこで、

県立文書館に収蔵される岡部藩主安部家伝来の文書群⁽²⁾のなかにみえる同家の文化活動について、先年、安部信亨（一七五八―一八二二）の時代における文化的コミュニティーの広がりと、その背景として安部家歴代が就任した大坂勤番の影響について言及したところである⁽³⁾。無論、それらは安部家の文化的事績の一端に過ぎず、県立文書館が収蔵する安部家関係資料からは、まだ同家の多くの文化活動の足跡をみてとることができるとしている。

こうした安部家の文化的事績を明らかにすることは、本県の歴史をひもとくに留まらず、江戸時代における大名文化の実相を明らかにするうえでも意義があるものといえる。

よって、引き続きその文化活動に着目していきたいが、とりわけ本稿ではそのなから安部家と異国文化との交わりについて焦点をあてることとしたい。

安部家と異国との関りについては、これまで顧みられることがなくやや異質な印象を受けるが、実は安部家が異国文化へと強く関心を示していた痕跡が県立文書館資料ほかには遺されているのである。

現時点では安部家と異国文化との間には少なくとも大きく二つの接

点があつたことが指摘できる。

一つは江戸時代前期に我が国に渡来した黄檗僧との交わり、そして江戸時代中後期頃に興つた唐物趣向への傾倒である。

本稿では、これら二つの接点を軸に安部家と異国文化について言及する。

【岡部落主安部家歴代当主】

①安部信盛―②信之―③信友―④信峯―⑤信賢―⑥信平

|| ⑦信允―⑧信亨―⑨信操―⑩信任|| ⑪信古―⑫信宝|| ⑬信発

一 安部家と黄檗

(一) 安部信盛と隠元隆琦

黄檗宗は、臨済宗・曹洞宗と並ぶ禅宗の一派で、承応三年(一六五四)弘法のため長崎に渡来した明の僧侶・隠元隆琦(一五九二―一六七三)⁽⁴⁾によつて日本へと伝来した。その隠元と安部家では、初代藩主となつた信盛との間に交友関係が認められる。

隠元は、俗姓を林、中国福建福清に生まれ、二十八歳の母との死別に際して地元の黄檗山萬福寺に入寺、崇禎十年(一六三七)に同寺の住持となり、黄檗山の復興発展に尽力した。

隠元が渡海したのは承応三年のことで、はじめ長崎興福寺、翌明暦元年には摂津普門寺へと迎えられ、万治元年(一六五八)には時の將軍徳川家綱(一六四一―一六八〇)へと謁見している。その際、京都近郊に寺院を建立させる旨の幕府の意向をうけ、寛文元年(一六六一)、家綱を大壇越として、隠元を開基とする黄檗山万福寺が京都宇治の地

に開創された。

隠元の渡海は、当時の支配者階層、仏教界に大きな影響を与え、本場中国の地より臨済宗の法灯を伝えた隠元の下には多くの日本僧が訪れ、一八世紀中頃には黄檗寺院は千近くにまで及んだとされる。

こうした黄檗宗の活動の後援者ともなつたのが、朝廷・幕府のほか、全国の大名、旗本たちであつた⁽⁵⁾。

さて、こうした背景のもと、安部家と黄檗との関りについて述べることにしたい。

安部家と黄檗との関係が正確に何時に興つたのかについては残念ながら詳らかとならないが、同家が黄檗宗の流入から程なくして交誼を結んでいたことは明らかとなっている。

既に一九八八年刊行の『黄檗文化人名辞典』「安部信盛」の項⁽⁶⁾には以下の記述が紹介される。

(前略) 同年(寛文二年)三月六日致仕し、号を性都という。延宝元年十一月二十七日没、年九十。法名を龍徳院妙峰性都と号し、武蔵榛沢郡岡部の源勝院に葬る。室は保科弾正忠直の女。万治二年、大坂定番として普門寺にあつた隠元を請うて齋を営み、「応安部撰津守齋」の偈がある。また寛文九年正月、弟次郎兵衛正成(法名香石性柱)が没した際に薦偈を求めているが、そのとき安部性度居士とあり、隠元より得た居士号と思われる。

(ハ ∨ 内稿者注)

続けて、同項に挙がる隠元の二つの偈も載せておく。

応安部撰津守齋⁽⁷⁾

錐頭活澁転扶桑、偶到名園却有光、屈曲山情描不尽、幽深妙意自
難量、静持雅誼寰中肃、渾朴高風格外揚、并載薰名天下重、杖藜
一擊凜秋霜。
（万治二年詠）

安部性度居士求薦弟香石性桂⁽⁸⁾

乞薦連枝益壯強、雖兄道義独全彰、挽回性桂帰蓮土、直指覺靈觀
法王、無漏福田種百日、有知慧眼豁重光、心花頓發金台上、始徹
衲僧舌相長。
（寛文九年詠）

偈とは韻を踏んだ詩句のことで、両偈のうち、万治二年（一六五九）に詠まれた偈は、「齋」すなわち僧侶を招いて振舞われる食事に応じて詠ぜられたことを示し、その内容から推して、隠元が安部撰津守信盛の招きに応じた際に献ぜられたものとみられる。

致仕後の寛文九年（一六六九）に詠ぜられた二つ目の偈は、信盛の弟正成の死に際して求められたものであるが、『黄檗文化人名辞典』が推察するように「安部性度居士」が隠元による居士号であるかどうかは偈からは俄かには判断しえない⁽⁹⁾。ただ、寛文二年に致仕して江戸へと戻っているはずの信盛が、弟の死没に際して宇治萬福寺の隠元にわざわざ薦偈を依頼していることから、そのもとで居士号を得たことは十分考えられる。

この二つの偈からだけでは信盛ならびに安部家が隠元とどれほどの交流を図っていたかは定かとすることはできないものの、少なからず二つの偈が作られた万治二年から寛文九年までの間、またその前後を

含めて隠元と信盛との間には継続した接触があったことは想像に難くない。とともに弟正成の弔いに黄檗僧へと偈を依頼していることからして、信盛個人のみならず、安部家内においてもある程度黄檗文化が受容されていたことは窺える。

（二）安部信之と木庵性瑠

安部家と黄檗との関りは信盛の代から興ったが、同家と黄檗との交わりは信盛との関係だけには止まらない。本節ではそれらを裏付ける具体的な資料を挙げてその実相をみていくこととする。

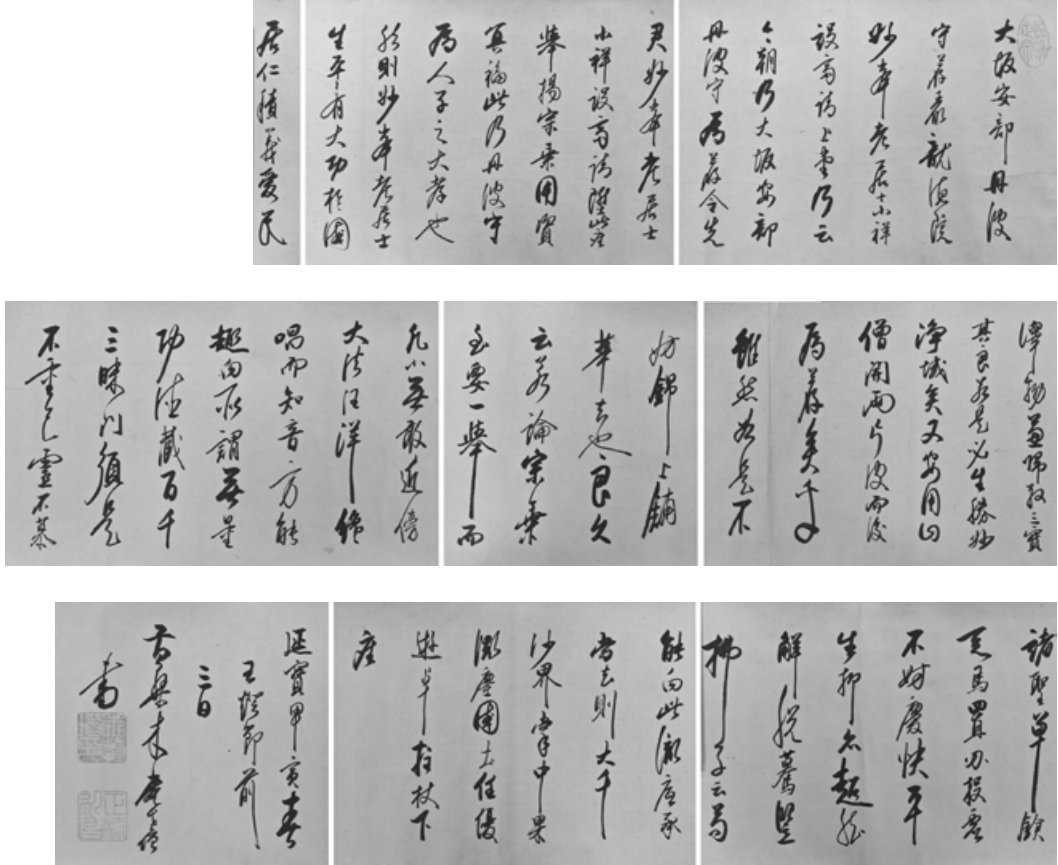
【図1】として掲げた資料がそれで、目録では「大坂安部丹波守追悼文」⁽¹⁰⁾として紹介されている。この資料は目録の刊行とともに公けにこそなっていたが、これまで掘り下げられる機会に遇してこなかった。しかし、安部家と黄檗宗との関係を窺う上では、大変貴重な価値を有している。

本資料は、縦二九・五cm、横三六六・四cm、冒頭の「大坂安部丹波守」から落款の「黄檗木庵老僧／書」まで四十三行を数える卷子装。引首印に「臨濟正宗」の朱文楕円印、落款に白文の「木庵瑠印」印、朱文の「正法永昌」印が押印される。

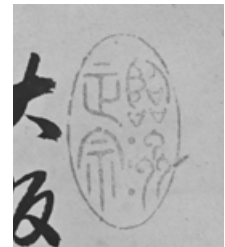
その筆跡、押印から判ずるに本巻の筆者は木庵性瑠（一六一一—一六八四）として間違いない。

筆者である木庵は、福建省泉州府晋江县の生まれで、十九歳にて出家し、三十代のとき隠元に師事、のちに印可を授けられた黄檗僧である。能筆としても知られ、師の隠元、法弟の即非如一（一六一一—一六七二）と並び「黄檗の三筆」として今日まで名を残している。

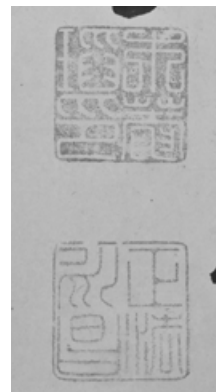
【図1】「大坂安部丹波守追悼文」全景



【図1】「大坂安部丹波守追悼文」印影



【引首印】
「臨濟正宗」



【落款印】
上「木庵瑠印」
下「正法永昌」

木庵は、承応三年に隠元が渡海したのちも中国に留まったが、隠元に招かれ明暦元年（一六五五）には渡海して長崎福濟寺に入り、万治三年（一六六〇）には師隠元も住した摂津普門寺、翌四年には宇治の黄檗山万福寺へと入り、寛文四年（一六六四）には隠元の法席を継いだほか、師と同じく將軍家綱に謁するなど武家からの厚遇を受け、江戸紫雲山瑞聖寺の開創など、日本での黄檗宗の発展に寄与している。その木庵と安倍家の関係を窺いうる本巻について、一先ず全文を掲載しておこう。

【大坂安部丹波守追悼文】翻刻

大坂安部丹波守荐嚴龍德院妙峯老居士小祥設齋請上堂、乃云、今朝乃大坂安部丹波守為荐令先君妙峯老居士小祥設齋、請陞此座奉揚宗乘、用資冥福、此乃丹波守為人子之大孝也。然則妙峯老居士生平有大功於國、居仁積義、愛民沢物、兼歸敬三宝。其良若是必生勝妙淨城矣。又安用山僧開兩片皮、而後為荐矣。千事雖然如是不妨錦上舖華去也。良久云、若論宗乘至要一挙、而凡小無敢

近傍大法、汪洋纒唱而知音、方能趣向所謂無量功德、藏百千三昧、門須是不重己靈不慕諸聖、单槍天馬置刃投処、不妨慶快平生、抑亦超然解脱、驀豎弘子云、苟能向此徹底承当去、則大千沙界、掌中果微塵国土任優遊、卓拄杖下座。

延宝甲寅春王燈節前三日 黄檗木庵老僧書

いま翻刻したなかに登場する「龍徳院妙峯老居士」が前掲の安部信盛を指し⁽¹¹⁾、冒頭の安部丹波守は信盛の嫡男安部信之（一六〇四―一六八三）が該当する。

落款に「延宝甲寅春王燈節前三日」とあることから、延宝二年（二六七四）正月十二日の執筆にかかり、この時玉造口定番として大坂に在番中であつた信之⁽¹²⁾が、前年十一月二十七日に歿した父信盛の死を弔うにあつて、父と同年に示寂した隠元の法嗣で京都萬福寺の住持であつた木庵へと依頼したものであることがわかる⁽¹³⁾。

本巻の内容は大きく二つに分けられ、「大坂安部丹波守」から「而後為荐矣」までを前段として安部家と木庵との関りが記され、以降の後段には法語が記される構成となっている。

本文後段は禪宗における諸師の語録・仏典等を典故とした難解な文章となつているが、前段部の概要としては、安部信之（安部丹波守）により父信盛（龍徳院妙峯居士）の小祥忌⁽¹⁴⁾の際に齋を設けることを請われたこと、また信之の父信盛を弔わんとする孝行によりてその任を引き受けたことが記され、あわせて歿した信盛の功を称える内容が連ねられている。

本資料からは、生前の信盛による黄檗宗への傾倒とその息子であ

る信之と黄檗宗との関りをも見て取ることができる。信盛と隠元から信之と木庵へと代が替わつても安部家と黄檗との間に継続した関係があつたことが垣間見え、安部家では隠元のみならず木庵らその法嗣らともある程度の接点があつたことを想起させる。

ここまで安部信盛・信友父子と黄檗僧との交遊についてみてきたが、その動機付けなど今後明らかにすべき点は多いものの、一方で少なくとも江戸初期から安部家では異国文化との接点を持ち、交流を図っていた点は特筆に値する。

そして、安部家と黄檗文化との接触の時期が、信盛・信之とも大坂定番として上方に赴任していた期間と合致する事実は、人的・文化的交流の面で安部家が早くから大坂勤番の恩恵に属していたことを示し、大坂勤番が安部家の文化活動を辿るうえで無視しえない要因であつたことを改めて明示するものといえるだろう。

末尾となるが、これまでに挙げてきた資料のほかにも安部家と木庵との接点を示すと思しき記録があるためこの機に紹介しておく。

木庵の語録である『木庵禪師東来語録』巻第七には

安部撰津守性常居士影^(実弟)

両眉堆雪月、双鬢掛銀絲、奇哉七五叟、人歎余古稀、王城堅守護、
禄位亦高巍、雖然頭戴烏紗帽、心地翻空扣祖機

とする偈が収録されている⁽¹⁵⁾。

偈題には確かに「安部」とはあるものの、木庵生前中に安部家のなかで撰津守に任せられ、かつ法名を性常とした人物は本家・分家とも

に存在していない⁽¹⁶⁾。

ただし、この偈と安部家との接点を匂わせるのが三句目の「奇哉七五叟」で、これは当然七十五歳のことを指し、前掲の信之が延宝六年（一六七八）に家督を嫡男信友に譲って隠居した歳と合致する。また、その際信之は出家しており、「性実・元忠居士」と号している。

前掲のとおり、信之の官名は「丹波守」で「撰津守」には任ぜられていない点などもあり、あくまで推測に過ぎないことは断っておくが、先に掲げた信之と木庵との関係を考慮に入れば、信之が出家に際して描かせた寿像に対し木庵が画讃を記したとしてもおかしくはないだろう⁽¹⁷⁾。

信之の父信盛、子信友がともに撰津守に任ぜられていることから木庵が誤った可能性も考えられなくはないが、本稿ではその可能性についてのみ触れるに留めておく。

二 安部家の唐物趣向

前項で述べた黄檗宗と安部家との交わりにおいて、信盛・信之の親子が関係を有していたことは見てきたとおりであるが、その関係がその後、どのように継続、発展していったかはその痕跡を見いだしてはいない。ただ、信之の子である信友（二六三八―一七〇一）も祖父、父と同じく大坂定番を務め⁽¹⁸⁾ており、その関係は一定期間継続していた可能性は高い。その点については引き続き今後の調査課題としたいが、安部家と異国文化の交わりは黄檗宗のみには限られない。

信盛の時代の黄檗宗との関りが一つの峰であるとするれば、今一つは天明から文化年間頃にかけての唐物趣味への傾倒が該当する。

これまで安部家の唐物趣向について言及されることは皆無であったが、これまで調査してきた結果、安部家八代目当主の信亨は唐物趣向に没頭した唐物大名であったことが明らかとなってきた。

本項では、信亨時代における唐物を中心とした安部家と異国文化についてその様相を追っていくこととしたい。

（一）安部信亨の唐物趣向

岡部藩八代目の藩主である安部信亨は、以前にも紹介したように安部家歴代のなかでその文化活動と交遊関係の一端を追うことができる稀有な存在である。唐物趣向はその文化活動の新たな一面ともなるが、信亨の唐物趣向はどのようなものであったのだろうか、まずは安部家伝来の文書資料のうち、「藩中家譜」⁽¹⁹⁾における家老菊池安兵衛武昭の事績を引いておく。

一、同（寛政）六甲寅正月十日、麴町お出火類焼有之。四谷御屋敷ニ罷在候節、三月二日御小袖被下置候。

五月三日、唐本前後漢書并明之陸宙種画御掛物被下置候。

（括弧内、傍線部稿者。以下同）

菊池武昭は、宝暦七年（一七五七）から文化四年（一八〇七）の病歿まで五十一年間に渡って岡部藩に出仕し、そのうちの三十年間を家老職として信允、信亨の二代の当主に近侍して藩政を支えた当代の功臣である。

その忠臣に対し、藩主であった安部信亨は当時貴重であった唐本（大

陸からの舶載品)の「前・後漢書」といった漢籍のほか、陸宙種(生歿年不詳)⁽²⁰⁾の掛軸を下賜していた。

以前に菊池武昭の漢学素養の一端について述べた⁽²¹⁾ところであり、その教養がどのように培われたのかを辿る記述としても評価できるところであるが、ここで着目すべきは信亨が家臣に対して中国人の掛軸を下賜している点にある。

この記述は、すなわち藩主信亨の手元にはある程度の量の唐物の品が集積されていたこと、また岡部藩内でもそうした唐物が下賜品として受容される共通の価値観があったことがみてとれ、安部信亨の唐物趣向の一端が示されている。

さらに、信亨の唐物愛好の実情をより直接的に示す記録が『よしの冊子』⁽²²⁾である。

同書は、寛政の改革を主導した陸奥国白河藩主松平定信(一七五九―一八二五)の家臣・水野為長(二七五一―一八二四)の筆にかかり、天明七年(一七八七)から寛政五年(一七九三)に渡って市井の様相のほか旗本、大名などの風聞の類を無数に書き留めた当代の世相を知るうえでの一級の資料である。

そのなかに、安部信亨も「安部撰津守」として幾度か登場する。ただし、あまり好意的には捉えられておらず、

一 安部撰津守ハ拙者ハ一躰武芸嫌故ニ自身ハ不致候へ共、親好
ミ候事故家来共ハ不絶出精いたし候。越中守殿御勤役被成
候二付、急ニ家来共へ申付出精致させしニハ及不申と申候
由。しかし母やかましく申候間、此節ハ忍び供ニテ他行ハ

不致候。甚気が詰り候と申候由。実説也。

など、大名としてはあまり好ましくならぬ行実が多く、同書を通じてその評価はあまり芳しいものではない。

そうした宜しからざる行状はさておき、注目すべきは

一 安部撰津守諸事唐めき事好ミ申され候由。食事迄豕牛杯を喰
れ候よし。尤右等の徒、彼是御旗本杯ニも有之候よし。

一 安部撰津守殿ハ元ト芸者好ニて御ぎ候処、近頃右相止唐人好
ニ御ぎ候由。一向埒明不申人のよし。安部よりハ増山河内候
才略可有之由。安部侯居間の屋根の上に、富士見台と申有之、
是へ夜ハ燭台を二ツ出し、ぬしも右へ登り、近習向も登ら
せ候て涼被申候由。婦人の声も折々仕候よし。昼之内ハ所々
見通し候二付、登不被申候よし。

との、信亨の唐物愛好ぶりを示す記事で、同書の記述からすると、その唐物好みは所謂書画骨董などに止まらずに食事など生活全般にまで及んでいたようである。

『よしの冊子』の性格からして、わざわざ信亨の唐物好きを留めている点は、信亨がこの時代特筆すべき唐物好きの大名の一人であったことを示唆するものといえる。そして、これが単なる風聞、噂の域に留まらないことは、次節にて挙げる二枚の額字が証明する。

(二) 安部家文書に遺る来船清人の額字

県立文書館が収蔵する安部家文書のなかには、幾つかの額字が含まれているが、実はそのなかには江戸時代に日本を訪れた来船清人の手によるものが存在している。

一つは、程赤城（一七三五―一八〇八）の手によるもの、今一つが程赤城と同時期に来日していた鄭雲台（生歿年不詳）のものである。程赤城の額字については以前にも触れたところであるが、本稿で改めて位置づけておきたい。

さて、額字に言及する前に江戸時代における中国との交易について、その概略を記しておこう⁽²³⁾。

わが国では日宋貿易、日明貿易など古くから中国との貿易は盛んに行われてきており、江戸時代に入っても交易は行われていた。

寛永十一年（一六三四）に中国からの貿易船（唐船）の入港が長崎へと制限されるも、元禄元年（一六八八）には唐船の来航数はピークに達している。しかし、同時に密貿易の横行、風紀の乱れなどの問題も多発したため、綱紀肅正につき、これまで長崎市内に自由に雑居していた中国人（清人）に対し、六三〇〇坪弱の敷地に建てられた唐人屋敷への滞在のみ許すこととし、また年間に訪れる船舶数にも上限が設けられるなど、人とモノの往来に制限がかけられ、以後この体制が幕末まで継続している。

紆余曲折を経た中国との交易ではあったが、開かれた長崎を通じて多くの中国人が日本を訪れている。江戸時代初期は、先に挙げた隠元、木庵ら黄檗僧の渡来があつたほか、明朝から清朝への王朝の交代期であり、明の遺臣や清朝から逃れるために渡海するものが多くみられた。

江戸時代前期では、水戸藩に招聘されることとなった儒者朱舜水（一六〇〇―一六八二）、尾張藩に仕えた文人陳元賛（一五八七―一六七二）、北島雪山に書法を教授、唐様書法の先鞭をつけた愈立德（生歿年不詳）らが代表的な人物といえる。

そして、渡航、交易が制限されたのち、日本の文人らの中国文化への憧憬の念を主として潤したのが長崎を訪れた来船商人たちであった。彼らの当時における影響力の大きさは、安永六年（一七七七）に刊行された『元明清書画人名録』⁽²⁴⁾に「清人来船」の項目が設けられ、一二〇名を超える名が記載されていることから窺える。

代表的な来船清人として、享保年間に来航した伊孚九（一六九八―？）のほか、沈南蘋（一六八二―？）、張秋谷（生歿年不詳）、費晴湖（生歿年不詳）、幕末期に来航した王克三（一八二二―？）・徐雨亭（一八二四―？）など枚挙にいとまがない⁽²⁵⁾。

それら来船清人の多くは書画の専門家ではなかったが、書画の仲介・鑑定や依頼をこなすだけの技量は有しており、なかには沈南蘋のように画を専門としたものも交じっていた。特に南蘋の画風は司馬江漢、伊藤若冲らにも影響を与えたほか、大名による絵画のなかにもその画風を慕った作品が多く遺されていることから江戸時代の画壇において大きな影響を与えた人物といえるだろう⁽²⁶⁾。

彼ら来船清人たちは、長崎に来航することを許された数少ない中国人であり、中国文化を希求する日本の書画家ら文人、漢学者らはその書画を入手することに苦心し、また直接相對することを望んで陸続と長崎へと赴くこととなった⁽²⁷⁾。

そうした来船清人のなかにあつて、前掲の程赤城は、その名をよく

知られた来舶清人の代表人物の一人といって過言ではない⁽²⁸⁾。

程赤城は、江南の生まれで名を霞生、字は赤城または柏塘と称し、字の赤城のほうで呼び慣わされている。記録によれば、安永六年（二七七七）から文化五年（一八〇八）までの三〇余年間に一八回に渡って日本を訪れていたことが確認されている⁽²⁹⁾。

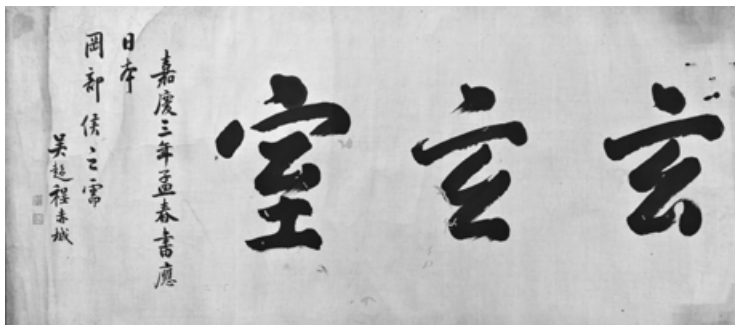
来航回数に比して日本の文化人との交流も多く、本稿でも後掲する大坂の大文化人である木村兼葭堂（一七三六―一八〇二）、安部信亨と交遊のあった伊勢長島藩の儒臣十時梅厓（一七四九―一八〇四）、春木南湖（一七五九―一八三九）らのほか、幕臣として長崎を訪れた大田南畝（一七四九―一八二三）、画師であった司馬江漢（一七四七―一八一八）らとの交流があった⁽³⁰⁾。

当時からその書画も多く、大田南畝が長崎奉行所に赴任中に記した手記には、宋の四大家の一人である蘇軾、元代の書の手趙孟頫、明代の文徵明、董其昌らの古書画とともに程赤城の書も多々記録されている⁽³¹⁾。また長崎のみならず、同じく南畝の記録によれば程赤城の書は遠く関東においても眼にする機会があったようである⁽³²⁾。

以上、今挙げた程赤城が当代においてその名を知られていた反面、もう一人の額字の筆者である鄭雲台は、その略歴などについて詳らかとなるところは殆どない。わずかに、天明四年（一七八四）の辰四番船、同五年の巳十番船で来航していたことが記録に残されているのみ⁽³³⁾で、管見の範囲でも鄭雲台の書画ほか当時の文化人との交流に関する足跡を辿る資料を確認していない。

それでは、肝心の額字に目を移すこととしよう。【図2】【図3】がそれぞれ程赤城、鄭雲台の筆にかかる。

【図2】程赤城筆額字「玄玄室」



【落款印】

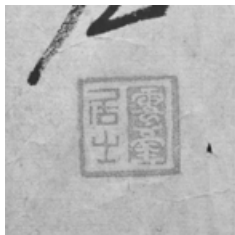
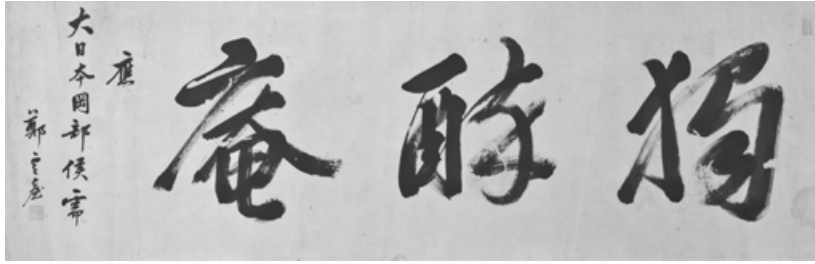
上「程霞生印」
下「赤城一字柏塘」



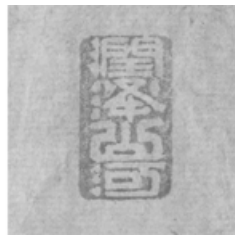
【引首印】
「屢游滄海」

【図2】程赤城筆額字「玄玄室」⁽³⁴⁾は縦四八・二c m、横一〇六・五c mで現在は未装丁のまくりの状態となっているが、その形状からも扁額であったと思われる。落款の「呉趨」はかつて春秋戦国時代長江下流に存在した呉国の地域を指し、程赤城の出身地であったことを示すほか、やや丸みを帯びた豊厚な書風、落款の書き様とも他に遺る程赤城の遺墨と一致することから、真跡とみてまず間違いない。押印は三顆。引首印に「屢游滄海」の朱文円印、落款に回文「程霞

【図3】 鄭雲台筆額字「独醉庵」



【落款印】
「雲台居士」



【引首印】
「潤沢山河」

生印」(白文印)、「赤城一字柏塘」(朱文印)の二顆が添えられる。他方、【図3】 鄭雲台筆額字「独醉庵」⁽³⁵⁾も、現在未装丁ではあるが程赤城の書と同じく元は扁額であつたと思われる。縦三五・九cm、横一一・二・八cm。

鄭雲台の書については他に類例がないため、真跡か否かについては判断に窮するところではある。ただ、略歴など子細が残されていない

点などから偽作が横行するほどの著名人ではなかったと思われ、紙中の為め書などからして、本稿では一先ず雲台の作品として位置づけたい。

さて、今挙げた二つの額字について、とりわけ着目すべき必要があるのはその為め書といえる。

これらの為め書をみると、程赤城が「嘉慶三年孟春書応／日本／岡部侯之需」、鄭雲台が「応／大日本岡部侯需」と書し、両額字が「岡部侯」すなわち岡部藩主からの依頼に依りて書されたものであること、「日本」「大日本」などの表現から両名の筆者が外国人、すなわち来舶清人であることを読み取ることができる。

では、二人の来舶清人に揮毫を依頼した「岡部侯」とは誰が該当するのか、であるが、これはいうまでもなく安部信亨であり、程赤城の為め書にある年記もまたそれを証明している。為め書にある嘉慶三年、すなわち日本という寛政十年(一七九八)当時、安部家では天明二年(一七八二)に隠居して主水正となっていた七代目当主の信允、そして信允から家督を譲られて当主となった八代目信亨が存命だが、岡部侯とあることからして、当時当主の座にあつた信亨(当時四十一歳)の依頼によるものと位置付けられる。程赤城は、このとき寛政九年、十年と続けて来日しており、その折に依頼がなされたのであろう。

一方の鄭雲台の額字では岡部侯とのみ記されており、依頼した安部家の当主は確定できない。ただ、鄭雲台が日本に来訪した時期から推察するに二度に渡って日本を訪れた天明年間の可能性が高く、こちらと同じく信亨からの依頼によるものとみて差し支えないだろう。

そして、「室」「庵」などの語からしてこれらが部屋あるいは庵に掲

げるための室号、庵号であり、これらの額字の存在は信亨が少なくとも「玄玄室」「独醉庵」の二つの書斎を用いていたことを意味している。

信亨は「静遠館」⁽³⁶⁾と名付けた別業を有していたが、そのほかに室（庵）号が確認されるのは管見の範囲では本額字が初めてとなる。

実際にどのような部屋に命名がなされていたのかについては分からないが、「玄々」とは物事が奥深いさまを表す語句である一方、「独醉」が文字通り独り酔いにふけるという意味で、例えば茶室や趣味に浸るための書斎などその趣きにふさわしい場所に掲げられていたであろう。

信亨の唐物趣向は世に評判が立つほどのレベルであり、またその傾倒ぶりは日常生活のなかにまで取り込むほどであったことは先に見てきた通りである。

であれば、自身の書斎を飾る扁額を来舶清人に依頼して誂えていたとしても何等不思議はなく、いま本稿で取りあげた安部家文書に遺されたこの二枚の額字は、信亨の唐物愛玩の実相を今日に伝える貴重な資料として認識を新たにすることがある。

ここまで信亨の唐物趣向について史資料を基に述べてきたが、次項では安部信亨の唐物趣向の周縁、特にその趣向を支えた関係者について述べることにしたい。

三 安部家の唐物趣向を支えた人々

(一) 安部信亨と伊勢長島藩主増山正賢

安部信亨の唐物愛玩がいつの時点から始まったのか、その起こりについては残念ながら記録がない。

ただ、その要因の一つとしては、信亨のほかこの時代の大名らがかなり小なり異国文化へと興味関心を寄せていたという文化的背景があつたことも無関係ではないだろう⁽³⁷⁾。

そのなかでも大の唐物愛好家として名を知られている大名が、伊勢長島藩主増山正賢（一七五四―一八一九）であり、七絃琴などを介した信亨との交遊の事実を踏まえれば、その唐物趣味にも大きな影響力を与えたと思われる。

増山正賢は、安永五年（一七七六）二十三歳の時に伊勢長島藩主を父正賢から継ぎ、享和元年（一八〇一）四十八歳にて致仕、巢鴨の下屋敷にて自らの趣味に没頭する隠居生活を送った風流大名である。

用いた号は今日よく知られている雪斎のほか、巢丘隠人、石顛道人、松秀園など多数。文化芸術に通じ、著書に書道について述べた『松秀園書談』があるほか、博物学にも関心を寄せ、虫の姿を精緻に極めた画帖「虫豸帖」などを遺している。また、沈南蘋風の精緻な花鳥画のほか、墨竹画なども手掛け、それらは当時の人々からも高く評価されている⁽³⁸⁾。

その正賢の中国文化への傾倒ぶりについては、庄内藩士池田玄斎（一七五五―一八五二）の随筆集である『弘采録』に詳しく、山口泰弘氏の研究によりその驚くべきともいえる中華三昧の生活ぶりが紹介されている⁽³⁹⁾。

それによれば、書斎の座敷は全て中華風で、長押には中国様の絵画の額が用いられていたこと、また供された食事では吸い物から酒、器、箸に至るまですべてが唐物であつたとされている。更に書き留められたなかには、懇意の間柄になると衣裳を全て中華風（清朝風）に飾り

立てた女中が給仕にあたることもあり、その傾倒ぶりは他を圧倒した徹底したものであったといえるだろう。

これらの記録で思い起こしたいのが、先ほど『よしの冊子』で紹介した信亨の「唐めき事」の愛好ぶりを示す記事で、信亨と正賢とが日常生活まで中華趣味で彩る同種の数寄物大名であったことが判る。

増山正賢と安部信亨、両名の縁がいつ頃からはじまったのかは今後調査の必要があるものの、両家が同じ譜代大名として大坂勤番を務める家柄⁽⁴⁰⁾であったことがその背景にはあろう。そして、両者は、天明五年（一七八五）に信亨（二十九歳）、翌年には正賢（三十三歳）が琴士児玉空々率いる七絃琴の結社に入会しており、少なからずこの頃には同好の士として付き合いを始めていた⁽⁴¹⁾。

画僧雲室（一七五三—一八二七）の自伝『雲室隨筆』⁽⁴²⁾ではその関係を「厚友」と称しているが、事実文化三年（一八〇六）には信亨の娘みの子（生？—一八四〇）が正賢の嫡男正寧（一七八五—一八四二）に嫁いで縁戚関係⁽⁴³⁾にまで発展していたことなどからも、両名の存命中は昵懇の間柄として交友を続けていたことは間違いないだろう。

あわせて、前出『よしの冊子』では、松平信濃守の質実剛健ぶりとの対比として、増山正賢、安部信亨、そして旗本の久世広景を書画会好きな面々として紹介している⁽⁴⁴⁾。

同書ではほかに三人を並べて悪しざまに書き綴っており、正賢、信亨（ならびに久世広景）は当時の悪友ともいえ、七絃琴、唐物、書画と当時の文人趣味を同じくする同好の士として書画風雅の世界にどっぷりと浸った大名であった様である。

増山正賢と安部信亨、両名が同好の士たりえたのは、もとより志を同じくしていたことに由来するのか、あるいはいずれかの影響により感化されたものであったのか、その発端は判然としない。

ただ、増山正賢は、周囲を書画の世界へと感化していたことが示唆されるほどの文化的影響力を持っていた点⁽⁴⁵⁾、これまでに知られている範囲でも文人大名としての文化活動の広さは信亨と比して圧倒的なものがある点などから、正賢の唐物好きが信亨の琴線に触れた可能性が高いものと推察される。

その正賢がどのように中国文化との接点を持ちえたのかについては、一つには藩儒の十時梅厓・江戸詰画師であった春木南湖らを長崎に遊学させていたことが挙げられ、来船清人に自身の書画を添削させたほか、その書画の技法を学ばせるなどしていた。また、正賢は長崎と強いネットワークを構築していた大坂の商人木村兼葭堂とも昵懇の間柄ともいえる関係を築いていた。

前掲のように正賢は直接的にも、間接的にも異国文化を摂取するためのコネクションを持っていたが、実は今挙げた正賢の中国文化摂取のためのネットワークはそのまま安部信亨とも深く関わっているのである。

次節ではその周辺についてみていくこととしよう。

（二）安部家と伊勢長島藩士梅厓・南湖のネットワーク

増山正賢の有する人的コネクションのうち、ここでは春木南湖、十時梅厓と安部家との関りについてみていくこととしたい。

十時梅厓、春木南湖、とも安部家文書に遺る詩巻「暮春 岡部侯の

「静遠館に従ず」において信亨に詩を献じており、長島藩士でありながら安部家とは無縁でないことは既に言及しているところである⁽⁴⁶⁾。

十時梅厓は大坂の生まれで、名を業あるいは賜、通称半蔵と名乗った。趙陶齋（一七一三―一七八六）に書法を学び、陶齋が正賢に招聘されるに随伴し、天明四年（一七八四）に正賢のもとで藩儒となったほか、寛政二年（一七九〇）には藩の許しを得て長崎へと遊学、費晴湖、陳養山らと交遊している⁽⁴⁷⁾。

藩儒のかたわら書画の仲介者としても活動しており、なかでも安部信亨の書画を尾張の商人内田蘭渚（一七四七―一八三三）に用立てたことを記す書状が残されている点は特筆に値する⁽⁴⁸⁾。享和元年（二八〇二）の九月二十一日付の梅厓から蘭渚宛ての書状には

一、安部侯墨蘭之儀承知候、則近習之人へ懸合候処、此節ハ候も抹茶のミ、其他御用向繁、筆硯之儀ハ兎角延引勝と申候。依之、拙者珍藏之寄合書

○長島侯 竹 ○安部侯 蘭

○董九如 梅 ○武田安芸守 菊

○稲垣若狭守 靈芝

右寄合書唐紙半切もの有之候、右を少々酒へ被成被下候ハ、御譲可申候、御好ニ候ハ、当所ニテ修覆申付、後便差上申候、否御報可被下候。

とみえている⁽⁴⁹⁾。

本書状は多くの示唆に富んでおり、大変興味深い。特に信亨が茶

道に熱を入れていたこと、また蘭渚によりその画が所望されていたことが示すようにその書画に一定の需要があったことなどが窺える。特に、梅厓が茶道に熱を入れ筆が進まない信亨の蘭画に替わって用立てた寄合書は、長島侯（増山正賢）、安部侯（安部信亨）、武田安芸守（武田信明 一七五三―一七八八⁽⁵⁰⁾）、董九如（井戸弘梁 一七四五―一八〇二）ら前掲の『雲室隨筆』にて「厚友」と称された面々を筆者とし、のみならず詩巻「暮春 岡部侯の静遠館に従ず」にて信亨に詩を寄せた稲垣若狭守定淳（一七六二―一八三二）を加え、これまでの安部信亨の交遊関係をそのまま表象したものであり興味深い。

また、梅厓の仲介した書画には来舶清人の者も多く、なかには本稿で紹介したものと同様の額字類も含まれている。

尾張の商人下郷学海（一七四二―一七九〇）⁽⁵¹⁾らに宛てた寛政二年（一七九〇）の五月七日付けの書状がそれで、寛政二年の長崎遊学時に際して学海に頼まれた額字と聯について、それぞれ来舶清人の朱衡と朱鏡涛に依頼して揮毫してもらったことを伝えている⁽⁵²⁾。また、下郷伝芳宛ての十一月三日付の書状⁽⁵³⁾でも、依頼のあった来舶清人周壬録の額字を巡り、増山正賢、春木南湖の取り計らいの跡を留めているなど、これらは安部信亨の額字の調達ルートを考えるうえでも無視しえない内容といえる。

次に紹介する春木南湖は、江戸にて生を受け、名を鯉、通称を門弥と称し、江戸時代においては谷文晁と並んで高名な画師として知られている。増山正賢に召し抱えられて長島藩の江戸詰の御抱画師となつて活動し、梅厓に先立ち天明八年（一七八八）には長崎へ画を学びに赴いている⁽⁵⁴⁾。

その際に記された日記を『西游日簿』⁽⁵⁵⁾と言ひ、大坂の木村兼葭堂宅を発して、九月末から十月末までの一か月ほどの長崎滞在を經へ大坂に戻るまでが記されている。長崎滞留の折には、来船清人である費晴湖、張秋谷、程赤城らと筆談を通じて交誼を結んだほか、主君である正賢の画ならびに正賢所蔵の中国画を来船清人らに見せ、その批評と鑑定とを乞うている。

また、長崎を訪れた際、南湖はかなりの数の書画を注文しており、十月十九日条では王蘭谷、程赤城の額字を十五枚も入手している⁽⁵⁶⁾。これらのなかには知人からの依頼に応えたものも交じっていたことは想像に難くないだろう。

この例をみるに、藩主が長崎に直に赴くことができないのは当然だが、その代替として家臣を派遣することで、間接的にであれ来船清人との交流を果たすことは可能であった。

そして、同日記ですこし注目したいのは天明八年十月二十三日条に、

費晴湖芸松楼ニテ余画テ米家之山水ヲ、

山ノ山ヲ晴湖画ス、全ハ為山水図、赤城・文虎讚ス、別

携歸ル

晴湖余詩賦ヲ和

甚佳興ナリ、夫ヨリ安部侯御用建ニ知人ニ

成ル、字留 俗名祭宇十郎孫次伝言アル

とある点で、本条によれば南湖は費晴湖と詩賦を和した後、「安部侯」

の用立て人と知り合いになったとある。

この「安部侯」が誰を指すのかは検討を要する⁽⁵⁷⁾が、これまで南湖と安部家の関係から察するに安部信亨の可能性が極めて高く⁽⁵⁸⁾、安部家もまた長崎へと人を遣わし、唐物入手に手を尽くしていたことを示す証左ともとれる記録である。

いま、長島藩士十時梅厓と春木南湖の唐物、舶来清人とのつながりを示したが、そうした彼らがいずれも安部信亨との交友を有する人物であったことは、信亨が長崎を訪れる来船清人らの書画を求めらるにあつて強力なコネクションとなつていたはずである。

(三) 安部家と木村兼葭堂の「コネクション」

安部家と長崎の来船清人とのコネクションを支えた人々として、増山正賢をはじめとした伊勢長島藩グループを挙げたが、あわせて紹介すべきが木村兼葭堂である。

木村兼葭堂といえ、大坂の酒造業者を営みつつ世の文化・学問に広く関心を寄せて博学を極めた当代最高峰の文化人である⁽⁵⁹⁾。またその交遊は上は大名から下は庶民、来泊清人らまでに至り、広範なネットワークを築いていた。

そうしたネットワークのなかで兼葭堂ととりわけ親交厚かつたのが、増山正賢であり、その家臣である春木南湖、十時梅厓らであつた⁽⁶⁰⁾。

正賢は、自身が大坂加番の任期を終えた天明四年（一七八四）、兼葭堂をともしない江戸へと下向。数カ月にわたり兼葭堂を歓待しているほか、寛政元年（一七八九）に行われた酒造改めにて密造の疑いかけられ謹慎に処された兼葭堂を自領内川尻村に招き、数年間庇護して

いる。更に、享和二年（一八〇二）正月二十五日に没した兼葭堂の墓碑銘の撰文および書丹が正賢の手によるなど、その親交の深さが窺えよう。

両者の接点は、兼葭堂の日記『兼葭堂日記』（以下、『日記』）天明三年（一七八三）八月、すなわち正賢三十歳の時に命ぜられた三度目の大坂加番勤務の際と目されている⁽⁶¹⁾。

この事実は、大坂加番在任が上方の文人との接点を創出していたことを示すが、これは増山家に限ったことではない。

兼葭堂が留めた自信の日記にはおびただしい数の人物が登場し、その交遊関係の広さを伝えるが、実はその中には安部家の名も連ねられている。のみならず、かなり親密な交際関係を構築していたことが指摘されている⁽⁶²⁾。

『日記』に「安部」の名が登場するのは天明六年（一七八六）八月十六日のことで、これは無論当時の当主であった信亨を指す。信亨が同日記に登場するのは、天明六年から翌天明七年、そして寛政八年（二七九六）から享和元年までで、この期間はそれぞれ信亨の大坂加番（中小屋口）、大坂定番（京橋口）在任中の期間にほかならない。

『日記』は、原則何処で誰と、という簡素な記述に留めるに終始しており、実際に兼葭堂が大坂市内にある信亨の屋敷を訪れてどのような話をしていたのかは詳らかとはならない。

一例として天明年間の記事を抄出【表1】してみたが、信亨の大坂在任時には往来を重ねて面会していることが窺え、信亨帰東の際には兼葭堂は見送りにまで出向いている。

信亨が定番に当たった寛政八年（一七九六）においてもその関係に

は変化がなく、兼葭堂が竹田孫介なる人物に送った同年十月十五日付の書状では

（前略）当所御勤番安部侯など小子義も至而御懇志ニ御坐候、度々御招ニ御坐候、小子も難有御事とも多く御坐候へとも、日夜とも忙敷候、困入り候。（後略）

天明 6.8.16	渡辺次右衛門 ⁽⁶³⁾ 始来ル 屋後安部撰津守様御目見
天明 6.8.22	本川九十九へ行帰り安部撰津守様へ旅邸ニ行申候
天明 6.10.6	明六ヨリ城入安部侯邸ニ行
天明 6. ⑩ .8	早朝の安部撰津守様邸へ行
天明 6. ⑩ .14	早天春木氏道伴城入安部撰津守様邸へ行
天明 6.11.1	早天登城安部侯邸 ニ行ク曾谷仲介道伴
天明 7.2.1	登城安部侯邸
天明 7.5.24	登城安部撰津守邸
天明 7.2.2	七ツ時分の安部侯邸へ行
天明 7.8.8	夜八ツ時ヨリ船ニテ安部撰津守侯発駕ヲ京橋迄送ル

などとも記し、昵懇の間柄が継続していたことが確かめられる⁽⁶⁴⁾。

そして、肝要なのは兼葭堂が伊勢長島藩士グループ以上に唐物および舶来清人とのコネクションを有していたことである。

兼葭堂自身も唐物の書画、典籍類の収集を積極的に行っていたことは知られているが、その過程で時には来舶清人らと贈答しあい、書翰を取り交わしている⁽⁶⁵⁾。またそのかたわら、依頼があれば長崎を訪れる来舶清人への書画依頼の取次を行っていた⁽⁶⁶⁾。

その仲介役となっていたのが、来舶清人らとの交渉を行う清川栄左衛門、林梅卿らの唐通事、また

唐船から荷揚げされた書画の鑑定を行った荒木為之進ら唐絵目利の存在である。彼らは、一般人が出入り不可能な唐人屋敷の中に入ることが可能な数少ない存在⁽⁶⁷⁾であり、彼らと交友関係をもった兼葭堂は、彼らを介して来船清人らの書画を依頼、入手していたのである。

安部信亨が自らの唐物趣向を充実させるにあたっては、長崎との接点を有するこうした唐物愛好家とのネットワークを構築することは必須であった。

そして、今挙げてきたネットワークこそ信亨の唐物趣向を満足させるうえで十二分に助けとなったことは言を俟たないといえる。

おわりに

以上、本稿では文書館収蔵の安部家文書に遺された書画資料を軸に安部家と異国文化との交流、またその交流を支えたネットワークについて述べてきた。

安部家文書も数百点規模で現在まで伝来したとはいえ、本来の文書群の大多数は散佚しており、またその所領が三か所に分かれていたこともあつてかその全容については容易に明らかにはし難い。ただ、本稿で述べてきたように、少なくとも安部家が異国文化との交わりについて積極的であつた時期があつたことは間違いない事実といえよう。

当時の大名のなかには異国文化との接触到に大なる関心を払っていたものが少なくないが、実は安部家もそうした異国文化へと憧憬の念を持つて活動していた大名の一人として位置づけられるのである。

とともに、その欲求を満たすための文化的ネットワーク、それも日本においても一流の文化人として名の知られた人々とのネットワーク

を構築していた事実の特筆すべき事項といつてよい。

こうしたネットワークがいつ頃形成されたのか、その端緒については捉えがたい。ただ、『兼葭堂日記』天明六年閏十月十四日条で、兼葭堂は春木氏、すなわち春木南湖を伴つて安部家邸を訪れている点は注目に値する。

管見の範囲では、南湖と安部家との接点はこの記事が初出で、また、この天明六年は、信亨の入会に一年遅れて七絃琴の結社である空々琴社に増山正賢が入社した年でもある。

断片的な情報からの推測となるが、あるいはこの天明六年は信亨が増山正賢ら長島藩の文人達と木村兼葭堂と間にコネクションを形成（あるいは確固とした）した節目の年になるのかもしれない。

そして、安部家と黄檗僧、増山正賢、そして木村兼葭堂とのコネクションを有するに至った基盤ともいべきが、大坂上方に勤める大坂加番、定番にあつたことは、安部家の文化活動を論じるうえで無視しえない。

そもそも、大坂定番は大坂城代とともに西国の動向を把握する要職であつたが、江戸と長崎とを結ぶ中継地にあつて、城代とともに長崎奉行の奉書の確認、また江戸への往復の際に立ち寄る長崎奉行との寄合に参加するなど異国との玄関口である長崎とは接点を有していた。

安部家では信盛、信之、信友、信允、信亨の五人が大坂定番に就任し、その任期は最低でも十年にわたっている。長崎からの情報と舶来品が流通する上方の地でそれだけの長い期間を過ごしたことは、安部家の異国文化への関心を高める一助となつたものと思われる。

信亨当時の安部家では、既に家老クラスを立てて上方商人に借銀の

交渉にあたらせるなど藩財政が傾きつつあるなかであり、藩主とはいえ私的な関心事に対して財を傾けるのは為政者の姿勢として今日の価値観でいえば褒められたものではなからうが、その結果として残された文化活動の足跡は非常に広範でかつ価値あるものとなった。

特に増山正賢、木村兼葭堂はこれまでに見てきたように大田南畝ら当代の文化人との大規模なネットワークを形成しており、彼らと昵懇であった安部家もまたその文化圏に属していた文化人らとの接点をもっていた可能性は極めて高い。本稿では追いきれなかったが、これらの文化人、また大坂・長島藩関係と安部家とのネットワークについては以後も大いに研究の余地がある。

岡部藩はわずかに二万石の小藩といってもよい大名ではある。ただ、その文化的活動は意外ともいってよいほど濃密なものであり、今後もその足跡については考証していく価値が認められる。

註

- (1) 代表的なものに、『新編埼玉県史』通史編3近世1(埼玉県、一九八八年)、同通史編4近世2(一九八九年)ほか、『新修豊中市史』第1巻通史1(豊中市、二〇〇九年)、同第8巻社会経済(二〇〇五年)、『新城市誌』(新城市、一九六三年)がある。教育面では藩校など『埼玉県教育史』第2巻(埼玉県教育委員会、一九六九年)に詳しい。
- (2) 県立文書館には、安部家から寄贈された「安部家(岡部藩主)文書」(安部家文書)と、安部家から養子を迎えた池田家より寄託された「池田氏収集安部家文書」(池田氏収集文書)の二つが岡部藩主安部家の文書として収蔵されている。伝来過程については、収蔵文書目録第二十一集『諸家文書目録Ⅲ』(県立文書館、一九八五年)を参照されたい。なお、資料名に

ついては適宜改めたものがある。

- (3) 拙稿「文書館資料にみる岡部藩主安部家の文化交流の一断面―長島藩・空々琴社との交流―」(『文書館紀要』第三十三号 県立文書館、二〇二〇年)参照。稿内では、安部家関連文書群内に遺された詩巻(安部家文書No.196)を中心に、安部信亨と伊勢長島藩士らとの交流と、その媒介となった大坂勤番ならびに七絃琴について紹介した。
- (4) 隠元隆琦の略歴および影響等については、『黄檗文化人名辞典』(思文閣出版、一九八八年)ほか図録『黄檗 京都宇治・萬福寺の名宝と禅の新風』(九州国立博物館、二〇一一年)、図録『黄檗の美術 江戸時代の文化を変えたもの』(京都国立博物館、一九八三年)等を参照。
- (5) 黄檗宗との接触はいわゆる鎖国下のなかで外来文化に接する貴重な機会ともなり、多くの大名が交流を図った。『西国大名の文事』(葦書房、一九九五年)のほか、近年では図録『殿様の愛した禅 黄檗文化とその名宝』(鳥取県立博物館、二〇一九年)のほか、高井恭子「日本黄檗を支援した大名をめぐる」(『黄檗文華』一二九号 黄檗文化研究所、二〇一〇年)に詳しい。大名のなかには帰依するものも出ており、江戸瑞聖寺の開基で、木庵性瑫へと帰依した摂津麻田藩主青木重兼(法名・端山性正 一六〇七―一六八二)などが挙げられる。
- (6) 前註4『黄檗文化人名辞典』参照。
- (7) 『新纂校訂隠元全集』第六巻『隠元和尚雲濤二集』(開明書院、一九七九年)所収「普門草録」参照。
- (8) 前註7『新纂校訂隠元全集』第十巻『松堂統集』所収。
- (9) 「武蔵岡部安部信盛家譜」(安部家文書No.138)をはじめとした系図の類のほか、家臣によって編纂されながら、安部家歴代の事績を子細に書き連ねた「滋安家譜」(安部家文書No.157)にも信盛が寛文二年に致仕して出家したことのみが記され、その命名者は明らかとされていない。
- (10) 安部家文書No.184-3。
- (11) 信盛の院号は「龍徳院殿妙峯性都居士」。
- (12) 信之は寛文八年(一六六八)から大坂定番に就任している。
- (13) 安部家と木庵を巡っては、前掲註5で挙げた高井恭子氏論考にて指摘がある。ただし、論考では木庵全集にみえる「与安部豊後守居士」の偈を「安

部豊後守信盛」として安部信盛に宛てた偈と解している。偈のなかでは閣下の尊称を用いていること、また官名から推してこれは恐らく老中を務めた阿部忠秋（一六〇二—一六七五）のほうを指すのではないかと思われる。当時、阿部と安部は混同して使用されることが多く、木庵が誤った可能性がある。なお、木庵は忍藩主であった阿部忠秋の死に際し仏偈（白河集古苑蔵）を詠じており、図録『武家の文化―近世大名阿部家の遺宝―』（白河市歴史民俗資料館、一九九六年）ほかにてみるることができる。

(14) 一般的には一周忌を指す。

(15) 『新纂校訂木庵全集』第三巻『木庵禪師東来語録』（思文閣出版、一九九二年）所収。

(16) 安部信之の嫡男信友が寛文八年（一六八八）に撰津守に叙任しているが、その法名は「乾徳院徹応宗澄」である。

(17) 本偈は制作年代が記されていないが、『木庵禪師東来語録』が所収する偈の制作時期は明暦年間から寛文年間にかけてが多く、信之の隠退の時期からはやや離れている。寛文三年に七十八歳で出家した信盛（法名・性都）を指している可能性もある。なお、撰津守に任ぜられた阿部家の人物も見い出せない。

(18) 信友は貞享三年から元禄十四年まで（一六八六—一七〇一）の十六年間定番職にあった。

(19) 池田氏収集文書No.4「〔藩中家譜四〕」所収。途中に遺脱があり断片的ではあるが寛政年間から慶応年間までの家臣の来歴が記される。

(20) 浙江平湖の出身で字を歩衡、漁六と号し、山水や人物画に秀でたとされる。明代の人物となっているが、実際は十八世紀、清代中期頃の人物である。市河米庵編「小山林堂書画文房図録」に花卉図が掲載される。

(21) 拙稿「文書館資料にみる岡部藩王安部家の文化交流の一断面―長島藩・空々琴社との交流―」参照。また、和刻本か舶来本か不明だが、『藩中家譜』では菊池武昭に「晋書」一箱の下賜が認められる。

(22) 引用は『随筆百花苑』風俗世相偏二・三『よしの冊子』（中央公論社、一九八〇・一九八一年）に拠った。

(23) 本稿では、松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』（思文閣出版、二〇〇七年）ほか、山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』（吉川弘文館、一九九五年）などを参照した。

(24) 彭城百川（一六九七—一七五二）によって刊行された『元明画人考』をも

とに、その後木村兼霞堂らによって補訂がなされたもの。

(25) 図録『橋本コレクション 中国の絵画―来舶画人―』（渋谷区立松濤美術館、一九八六年）などに多数の図版が収められる。

(26) 沈南蘋とその影響については図録『江戸の異国趣味―南蘋風大流行―』（千葉市美術館、二〇〇一年）に日本への影響と合わせてまとめられており、その位置づけが明白となっている。

(27) 平松勘治『長崎遊学者事典』（溪水社、一九九九年）では、遊学に及んだ延べ人数として一四三三名を数えている。

(28) 程赤城の事績を伝える論考は多く、前註23 松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』等に詳しい。

(29) 中村質「日本来航唐船一覽 明和元々久元年」（『九州文化史研究所紀要』第四十一号 九州大学文化史資料室、一九九七年）参照。来航は安永年間に4回、天明年間2回、寛政年間6回、享和年間4回、文化年間2回となっている。

(30) 大正時代に編さんされた『大日本人名辞書』（東京経済雑誌社、一九二二年）などは、「書画を能くし、能く我が国語に通ず。其の作る所和歌多し。伝へ云ふ、「習はずに書くや此の仮名文字交じり今は唐でも書くや此の仮名」の一首、此の人の作なりと。」など極めて日本通であったエピソードを伝えている。交流の広さと書画の需要の高さが認められる一方、同時代における評価は必ずしも良いものばかりではなく、司馬江漢の『江漢西遊日記』（『東洋文庫』四六一 平凡社、一九八六年）では、江漢が長崎に遊学した際、現地の「唐人が、り」の話として「程赤城は浙江のうち、乍浦と云処の人なり。少し書を能くす。然共、無学人にて、皆商人の手代なり。（中略）皆学文亦は詩などを作ることは一向に知らずとなり。」などとの手厳しい評価もみえている。

(31) 南畝が長崎を訪れた際に記した随筆『瓊浦雜綴』『瓊浦又綴』参照。また長崎からの帰路の途上、山陽道矢掛宿の山名家にて「蘋薈」の額字を見たことをその紀行文である『小春紀行』に記している。いずれも『大田南畝全集』（岩波書店）所収。

(32) 文化六年の『向岡閑話』には「程赤城書、宇奈根村屏風においてあり。雨

余花滴滿紅橋、柳絮沾泥夜不消、曉桐忽無還忽有、春山如近復如遙 吳趨程赤城 此比のけしきに似て面白き詩なり」とあるほか、文化十四年の『丁丑掌記』にも「青樓江戸町二丁目名主西村佐兵衛所蔵 三月十二日一見 初代花扇書 冷雨幽亭不可聽、桃灯閑看牡丹亭、人間亦有痴於我、豈疑傷心是小青 程赤城」との記述がみえる。このほか、伝来は未調査だが、埼玉県内では入間市にある白髭神社の扁額「白髭大明神」が程赤城の筆にかかると見られる。寛政三年と乾隆五十六年の年記がみえ、一七九一年の作。

(33) 前掲註29 中村質「日本來航唐船一覽 明和元々久元年」参照。

(34) 安部家文書No.540 目録所収名は「書(玄玄室)」。

(35) 安部家文書No.508 目録所収名は「書(独醉庵)」。

(36) 詩卷「暮春 岡部侯の静遠館に從ず」(安部家文書No.196)。拙稿「文書館にみる岡部藩主安部家の文化交流の一断面―長島藩・空々琴社との交流―」参照。

(37) 西洋文化に代表的な大名としては、西洋絵画の技法を取り入れた秋田蘭画を興した秋田藩主の佐竹義敦(一七四八―一七八五)、西洋諸国の錢貨を图示した『西洋錢譜』、ヨーロッパの地誌本を抄訳した『泰西図説』など西洋の事情や文物に関心を寄せた丹波福知山藩主の朽木昌綱(一七五〇―一八〇二)、また薩摩藩主の島津重豪(一七四五―一八三三)などは中国語辞書である『南山俗語考』の編さんを命じ、自身もオランダ語、中国語に堪能であった。(中江克己『江戸大名の好奇心』第三文明社、二〇一四年など参照) 一方、唐物を愛玩した大名として、先に触れた沈南蘋の絵画に触発された大名らのほか、江戸時代初期には肥前鹿島藩の鍋島直條(一六五五―一七〇五)が挙げられる。直條は中国文化と文物とに傾倒し、関連資料のなかには多数の詩箋(漢詩の贈答などに用いる便箋で、刷り彩色などの加飾がなされている)が残されている。(中尾友香梨ほか『文人大名鍋島直條の詩箋巻』佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇一四年など参照) (38) 正賢の事績は、福井久蔵『諸大名の学術と文芸の研究』(厚生閣、一九三七年)に載つたのをはじめ、正賢の唐物趣向に言及した山口泰弘「江戸時代後期における中華文化受容の様相 画人増山雪斎二題」(『三重大学教育学部紀要』六十四号 三重大学教育学部、二〇一三年)など多数の専論がある。

近年では没後二〇〇年を記念した企画展「増山雪斎展」(二〇一九年)が三重県立美術館で開催された。

(39) 前掲註38 山口泰弘氏論考にて紹介される。

(40) 安部信亨は、天明六年に加番、寛政七年から享和四年まで定番を務め、一方の正賢は安永七年、同十年、天明三年、同九年の四回に渡って加番に任ぜられている。

(41) 児玉空々の琴社である空々琴社に入会しているのが管見の範囲で確認する最も古い安部信亨と増山正賢との接点である。長澤和彦「江戸文人の交遊―七琴琴社(空々琴社)の人々―」(『近世文芸研究と評論』第七十号近世文芸研究と評論の会、二〇〇六年)参照。

(42) 『続日本随筆大成』第一卷(吉川弘文館、一九七九年)所収によった。雪斎曾君選増山河内守殿伊勢長島侯大名にての一人にて、風流抜群の人なり。書画ともに直に華人によりて修せらるると申事なりしが、当時世の中の振合遠慮被致、風流家出入も皆断りにてありき。安部損津守殿武州岡部侯、武田安芸守殿高家、久世三四郎殿、井戸甚介殿、皆河内守殿交り厚友にて有けり。

(43) のち不明ながら離縁している。娘の名は前掲註9「滋案家譜」安部信亨の項に拠った。

(44) 松平信濃守の風聞において、「増山安部、久世三四郎ナドノ徒ニテナシ。書画ナドノ会キライ也」とわざわざ記されており、三名は書画会を好んでいた面々であったことが分かる。なお、増山正賢、安部正亨、久世広景は全員児玉空々の琴社に属した七絃琴仲間である(前掲註41 長澤氏論考参照)。

(45) 有坂道子「増山雪斎と木村兼葭堂」(『混沌』三十号 混沌社、二〇〇六年)参照。同論考では、増山正賢と同時期に加番を勤めた大名が書画への関心を高めた背景に正賢の影響があったとの見解を示している。

(46) 安部家文書No.196。拙稿「文書館にみる岡部藩主安部家の文化交流の一断面―長島藩・空々琴社との交流―」参照

(47) 十時梅屋の同時代評については、凶録『武士が描いた絵画』(黒川古文化研究所、二〇一六年)に詳しい。

(48) 梅屋の書画仲介については神谷勝弘氏の「十時梅屋による書画の仲介―内

田蘭渚宛書簡を手掛かりに」(『同志社国文学』八十四号 同志社大学国文学会、二〇一六年)を参照。

(49) 蘭渚の日記には安部信亨の蘭画を梅厓に頼んだ記述が登場する(享和元年九月十日条)。なお、蘭渚の日記については『名古屋芸術大学研究紀要』(名古屋芸術大学)第二十五、二十九巻にて享和元年、同四年が所収。

(50) 柳沢信鴻の三男で高家武田家に養子入りした。その没年から寄合書は信明歿年となる天明八年(一七八八)以前の作と分かる。

(51) 池大雅の弟子で池大雅・与謝蕪村の合作「十便十宜図」を所蔵した、鳴海の酒造業者。神谷天遊、内田蘭渚らとともに「蓬瀛勝会」という書画会に参加していた。なお、増山正賢は「十便十宜図」の冒頭に「聯璧」の二字を寄せている。(杉本欣久「中林竹洞の作画と精神」(『古文化研究』一号 黒川古文化研究所、二〇〇二年)に詳しい。)

(52) 『愛知県史』資料編20近世6学芸(愛知県、二〇一二年)所収。No. 六四四。

(53) 前註52所収。No. 六四八。

(54) 『長島町誌』(長島町教育委員会、一九七八年)、図録『江戸の風流才子増山雪齋展』(三重県立美術館、一九九三年)、図録『増山雪齋展』(三重県立美術館、二〇一九年)などを参照。

(55) 米山堂による複製版(一九二六年)が国立国会図書館デジタルライブラリーにてみることができ、本稿もそれを参照した。https://ndonline.ndl.go.jp/#/detail/R300000001-1000001760871-00

(56) 『西遊部日簿』同日条には「王蘭谷・赤城之書ニテ額十五枚出来ル」とある。

(57) 『西遊部日簿』の帰路では、備後福山城に立ち寄っているが、その折の記事には「備後之福山ハ当安部伊勢守候御城主也」とあり、阿部伊勢守正倫(一七四五—一八〇五)を「安部」と表記している。

(58) 木村兼葭堂の日記である『兼葭堂日記』には春木南湖の長崎遊学に先立つ天明六年閏十月十四日条に「早春春木氏道伴城入安部撰津守様邸へ行」とみえ、知遇をえていたことが知れる。

(59) 木村兼葭堂の活動ならびに交友関係については、多数の論考がある。本稿では図録『木村兼葭堂 なにわ知の巨人』(思文閣出版、二〇〇三年)、中村真一郎『木村兼葭堂のサロン』(新潮社、二〇〇〇年)、水田紀久『水の

中央に在り』(岩波書店、二〇〇二年)のほか、有坂道子「木村兼葭堂の活動の交流―四侯和牘にみる―」(『大阪商業大学商業史博物館紀要』第十三号 大阪商業大学商業史博物館、二〇一二年)、同「市井の蘭学―木村兼葭堂にみる―」(『日本史研究』第四〇五号 日本史研究会、一九九六年)のほか、内川隆志「近世大阪商人の美術品蒐集―升屋平右衛門「家蔵記」の分析から―」(『国学院大学博物館学紀要』第二十四輯 国学院大学、一九九九年)等を参照した。

(60) 兩名とも『兼葭堂日記』に登場し、なかでも十時梅厓については橋爪節也「十時梅厓の研究―兼葭堂日記』ほか資料を中心に―」(『近世大阪画壇の調査研究 II』大阪市立博物館、二〇〇〇年)が詳細に論じている。

(61) 前註45 有坂道子「増山雪齋と木村兼葭堂」参照。

(62) 安部家と兼葭堂との関係を指摘したのは、有坂道子「木村兼葭堂の交際圏―兼葭堂日記』に見える武士に着目して(一)」で、交際が天明六年(一七八六)の信亨加番在坂中に遡るものと述べ、日記を通じて六十回にのぼる接触があったことを明らかにしている。

(63) 安部家家臣。渡辺治右衛門。寛政二年に致仕したことが「藩中家譜」にみえている。

(64) 前掲註59 有坂道子「市井の蘭学―木村兼葭堂にみる―」にて全文が翻刻される。時代が下るが、明治十五年十月に上野公園で開催された「内国絵画共進会」には、安部信順(一八五八—一九二二)から木村兼葭堂筆の四幅対が出品されている。安部家で木村兼葭堂の画幅を所蔵していたのはこうした関係を反映していることと思われる。

(65) 一例として、来泊清人十四名が兼葭堂に贈った漢詩を成巻した「清客十四家贈兼葭堂詩巻」を挙げておく。巻頭には増山正賢の題字が添えられる。前掲註59『木村兼葭堂 なにわ知の巨人』参照。

(66) 前掲註59「木村兼葭堂の活動の交流―四侯和牘にみる―」参照。

(67) 例えば前掲註30の『江漢西遊日記』には、「春木門弥は誠に通詞」の草履取となり、布子にカラ尻をかゝけて行くを見たり。」とあり、春木南湖は唐人屋敷に入るにあたって唐通事の草履取りに扮せねばならなかった。